総合都市研究　第19号　1983

編集者のことば

総合都市研究は都市研究センターの研究論文誌として一般的評価も比較的高いと自負して良いであろう。ただ，これだけの量と内容の研究論文誌を年3回発行してゆくことは，事実上相当に荷の重い仕事である。1982年度の3冊（16，17，18号）では，3つの座談会・シンポジウムの記録と23編の研究論文および1つの研究資料が掲載され，全体として516ページの量の総合都市研究を送り出した。これだけの量の成果を約50名の研究員で毎年あげつづけてゆく事は，考えてみれば仲々大変なことである。各研究員はそれぞれ所属する学会に対する研究論文の発表や著作を行ないながらであるからなおさらである。

研究は，実態調査や実験の様に比較的短期に一定の成果を生むものもあれば，長年月の資料収集，分析，思索を経てようやく論文の形をとって生み出されるものもあって，一概に総合都市研究に発表される論文だけで都市研究センター研究員の研究活動の状況を判断されるのは困るが，一方，年間3冊の総合都市研究を発行するという（いつどこで決めたかは判然としないのだが）方針がある以上，これを安易に崩すことは，いかにも都市研究センターの研究活動が停滞しているかの様な印象を与えて好ましくないので，キチンと発行を続けたいと考えている。

1982年度から現われて来た，総合都市研究の出版のおくれが，本号では，やや極端な形をとって現れて来たことは，この際深刻に反省しておかなければならないだろう。本号に収録した「明治の東京計画」の研究討論会は，本年1月18日に開催されたものである。討論会の司会をされた千葉正士前編集委員が，当日の記録を丁寧に検討整理し記録としてまとめて下さり，メインリポーターであった藤森照信氏を始め各討論者の校閲を経て，本号の原稿〆切として最初に設定した6月末には編集者の手許に届いていたのである。それから印刷にまわすまでに3ケ月の期間が過ぎてしまっている。一日を争うものではないとはいえ，都市研究センター研究員以外の討論参加者には大変申しわけない事態といわなければならない。

総合都市研究が研究論文誌である以上，研究論文が〆切に間にあう様投稿されてから印刷・発表されるまでに5ケ月も半年もかかるということは大変に問題である。これでは研究論文のプライオリティを争う様な最新の成果は都市研究費によるものでもここには発表されないということになりかねい。都市研究センターの各研究員が総合都市研究を研究発表の場としてどの様に位置づけるのかという事，そして，その結果として総合都市研究がどの様な性格のものであるのかという事を改めて問題とする必要があろう。1984年度の初めには，おそらく3名の専任研究員（教授）が着任し都市研究センターは新しい画期を迎えることになろう。それだけに一層このことは重要である。

本号は，前述の研究討論会の記録の他に5編の論文と1つの資料を掲載した。内3編は，一昨年度で一応終了した「大都市居住問題の総合的研究（多摩地区の総合調査）」の調査研究結果の残りであり，この論文で一応このプロジェクトに関する調査研究の報告は終了したが，全体としての取りまとめが残っている。これは1984年度の総合都市研究に総合討論という形でまとめたいと考えている。

他の2編の論文は「建築線制度に関する研究」の2編である。このテーマに関連して5年間にわたって8編の論文が発表されたが，この研究も本号で一応の完結を見た。充分な紙数を使って論ずることのできる総合都市研究は，この様な一連の研究論文の発表の場として好適なものであるといえよう。

多くの都市研究センター研究員が，各々の研究成果を総合都市研究に発表してゆくことが，都市研究センターの活動に注がれている関心に応えてゆくことになり，新しい発展をしょうとしている都市研究センターにとって重要なことであると考えられる。　（石田　頼房）